

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2010年 12月 26日

派遣者氏名（専門分野）	井上 由里子（美学）
-------------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	ヴァレール・ノヴァリナの詩学 ——1990年代後半の「喜歌劇」における劇作と演出の相互作用
-------	--

派遣期間

2010年 10月 26日 ～ 2010年 11月 6日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	フランス	パリ	西パリ大学 ナンテール／ラ・デファンス	ジャン＝ルイ・ベッソン
	フランス	パリ	パリ第3大学 ガストン・パティ図書館	ジャン＝ルイ・ベッソン
	フランス	パリ	フランス国立視聴覚研究所 (INA)	ジャン＝ルイ・ベッソン

派遣先で実施した研究内容

劇作家・演出家・画家として活動するフランス人のヴァレール・ノヴァリナ (Valère Novarina, 1942年—) は、心理的葛藤や有機的な筋といった伝統的ドラマツルギーから逸脱した演劇でその名を知られています。劇言語というよりも詩的言語に近いテキストは、哲学や神学などの古典テキストを糧にする一方で、言葉の「表象」機能、人間行為の「模倣」、戯曲の「上演」という三重の意味でのルプレザンタシオン (représentation) を否定する前衛の精神に貫かれています。

ノヴァリナの作品は、創作活動初期の1970年代には難解・晦渋とみなされてなかなか日の目をみませんでした。1980年代には定期的なアヴィニョン演劇祭で公演をおこない、2005年には国立劇場コメディ・フランセーズの上演目録入りを果たし、次第に認知されてきました。2010年にオデオン座で組まれた特集もかつてない成功をおさめ、今や「現代前衛劇の古典」としての地位を確立したといえるでしょう。

言語の規則を踏み越え、思考の基盤を揺るがそうとする、その詩的言語が舞台上で広く通用するようになるまでには、言葉はもとより劇形式や演出においても試行錯誤を重ねられました。劇形式と演出の変遷のなかでも特筆すべきは、1998年に上梓された『架空のオペレッタ (L'Opérette imaginaire)』で見いだされた喜歌劇 (opérette) 形式です。それ以前は受難劇を思わせる形式をとり、ときに深刻でときに神秘的な様相を呈していたのに対し、喜歌劇形式の導入後はそれとはうってかわって、音楽と笑いにあふれる自由で陽気な雰囲気にも包まれるようになります。この喜歌劇形式は次のふたつの点で重要と考えられています。すなわち、ノヴァリナの演劇がインテリのみならず広く大衆に受け入れられる契機になったという点、そして、聖と俗、神秘と愚劣を拮抗させる中世の「聖なるパロディ (parodia sacra)」 (Cf. Christine Ramat, « Opérette théologique, théologie d'opérette : les paradoxes d'une dramaturgie spirituelle » in *La bouche théâtrale*, XYZ éditeur, 2005) の伝統を復活させたという点です。

そもそも喜歌劇形式の発展は、1996年の『食事 (Le Repas)』演出に際してアコーディオン奏者と喜劇俳優を起用したクロード・ビュシュヴァルト (Claude Buchvald) の炯眼に多くを負っています。この演出に感化されて『架空のオペレッタ』を執筆したノヴァリナが、例外的に自ら演出をおこなわずにビュシュヴァルトの手に託したことからも、作家がこの演出家に寄せていた信頼と期待を窺うこともできるでしょう。

今回の研究では、こうした1990年代後半の「喜歌劇」におけるノヴァリナの劇作とビュシュヴァルト演出と

の相互作用をめぐり、ノヴァリナの演劇性を吟味しました。具体的には、劇分析は出発前に済ませ、派遣期間中は現地でしか入手できない資料収集やインタビューを中心に次のような調査を進めました。

- ・ パリ第3大学ガストン・パティ図書館  
『食事』と『架空のオペレッタ』について批評記事と視覚資料の収集。
- ・ フランス国立視聴覚研究所 (INA)  
ビュシュヴァルト演出『架空のオペレッタ』の視聴。  
ノヴァリナの創作にかんするドキュメンタリーの視聴。
- ・ インタビュー  
演出家のマリー・バレ氏とジャン・ペロリーニ氏に質問。  
(『架空のオペレッタ』の演劇性や稽古方法などについて)
- ・ 西パリ大学 (ナンテール/ラ・デファンス校)  
舞台芸術学科のジャン=ルイ・ベッソン教授の指導。

### 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

1990年代後半の「喜歌劇」におけるノヴァリナの劇作とビュシュヴァルト演出との相互作用について分析することで、テキストにのみ沈潜する先行の文学研究では見落とされていた、ノヴァリナの言葉の演劇性を明らかにすること、それが本研究のねらいです。

今回の調査では、演出家ビュシュヴァルト氏とのインタビューが叶わず、『食事』(1996年)演出について十分な資料がえられませんでした。『架空のオペレッタ』(1998年)に関してノヴァリナの劇作とビュシュヴァルト演出を中心に調査をすすめた結果、研究目的である言葉の演劇性について次のことを明らかにできました。

喜歌劇をそれ以前のモノログ劇に比べた場合、形式の大幅な変更に対して、語彙やモチーフには共通点が多くみられます。ところがその共通する語彙やモチーフは、俳優の演技や演出によって意味を変化させます。たとえば、死について俳優が語る時、モノログ劇では不安で深刻な様相を帯びるのに対し、喜歌劇においては俳優が言葉の音楽と戯れることで深刻な意味を笑い飛ばします。あるいは、有名曲のメロディを相反する台詞と組み合わせる対位法において、言葉と音楽の聞きあいにより舞台上で新しい意味を生成することもあります。こうしたビュシュヴァルトの喜歌劇は、日常の論理を宙吊りにして世界を刷新するという点で、バフチンのいう意味での「カーニヴァル」に通じるものです。

以上のことから、喜歌劇形式の導入は形式上の変化にとどまらず、ノヴァリナの言葉に潜在していた「カーニヴァル」という演劇性の開花を意味するということが明らかになりました。5年後の2003年にノヴァリナが作・演出した『舞台 (La Scène)』では演出はもとより劇世界までもが、古い世界の死と世界の再生を祝う「カーニヴァル」に彩られていることを考慮するなら、古典テキストと同様にビュシュヴァルトの演出もまたノヴァリナの劇作に吸収されたといえます。

今後の課題としては、ビュシュヴァルトの影響を厳密に見定めるために、一方で『食事』をはじめとするビュシュヴァルト演出についてさらなる調査が必要であり、他方で19世紀後半のオペレッタ、ミュージック・ホールやキャバレーとノヴァリナ演劇との比較検討を通じて喜歌劇とカーニヴァルについて理解を深めなければならないでしょう。

### 派遣後の研究発表の予定

今回の研究をもとに考察をすすめ、2011年8月に大阪大学で開催される国際演劇学会大阪大会においてフランス語で発表する予定です。

